Osaka University Knowledge Archive

Title	「先秦思想暨出土文献国際青年学者学術研討会」に参加して
Author(s)	井上, 了
Citation	中国研究集刊. 2005, 39, p. 99-107
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61055
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

中国研究集刊　雨号（総三十九号）平成十七年十二月　九九―一〇七頁

「先秦思想暨出土文献国際青年学者学術研討会」に参加して

井上了

二〇〇五年三月二七日から二八日にかけて、台湾大学にて「先秦思想暨出土文献国際青年学者学術研討会」が開催され、[注1] 日本からは筆者を含む六名が発表者として参加することとなった（うち一名は事情により不参加）。別に、三月二五日から二六日にかけて同じく台湾大学で「「新出土文献与先秦思想重構」国際学術研討会」が開催され、[注2] 日本からの参加者六名はこちらの研討会の参加者としても登録されていたため、実質的には四日間連続での学会参加となった。日本側参加者のうちたまたま最年長の筆者が代表格とされたため、本シンポジウムの一般情報などを筆者なりに報告する。

そもそも我々がこれらのシンポジウムへの参加を許されたのは、コーディネーターである佐藤将之氏（台湾大学哲学系助教授）の御配慮によるものであるが、これらは孤立して開かれた会ではない。佐藤氏らを中心とする簡帛道家資料暨新出土文献研読会および浅野裕一氏を中心とする戦国楚簡研究会はすでに

「日本漢学的中国哲学研究与郭店・上海竹簡資料」国際学術シンポジウム（二〇〇三年十二月二八日、於台湾大学）

「戦国楚簡と中国思想史研究」国際シンポジウム[注3]（二〇〇四年三月二六～二七日、於大阪大学）

といった会を開催している。これらが開催されねばならなかった理由は佐藤氏「中国思想史研究における国際交流への覚書」（本誌三六号）に詳述されているが、要するに「日本における中国思想の研究は、このまま行くと、世界の中国学研究にコンテクスチュアライズされず……全く衰退してしまう」（同「覚書」）という認識に尽きる。

我々が発表を許されたシンポジウムは、上記の他にたとえば

「出土文献研究方法第二次学術研討会
— 上博簡与出土文献研究方法学術研討会」
（二〇〇四年四月一〇日、於台湾大学）

「日本漢学的中国哲学・思想研究：
観点・方法論・以及其意義」国際学術研討会[注4]
（二〇〇五年五月二八日、於台湾大学）

など一連の国際交流活動の展開を踏まえて位置づけられるべき性質のものであって、「日本の若い研究者が国際的な場で発表する／自らの研究を国際的にアピールする」ことの試みと解されよう。これが文字通りの「試み」に過ぎぬことは、「今後もこのような会議を開くかも知れないが、今回のメンバーで固定するつもりは全くない」という佐藤氏の発言に明らかである。

さて、煩瑣となるが、今回の「先秦思想暨出土文献国際青年学者学術研討会」の議程表を以下に掲げる。

三月二十七日（星期日）

開幕式　主持：陳栄華（台湾大学哲学系主任）

第一場　主持：杜保瑞（華梵大学文学院院長）

「国際化時代的中国哲学思想研究
— 青年学者国際交流的意義」
〔専題演講〕佐藤将之（台湾大学哲学系助理教授）

「張家山漢簡《蓋廬》的思想特色」
〔発表人〕福田一也（北京清華大学人文社会科学院高級進修生）
〔評論人〕林明照（東呉大学哲学系兼任講師）

第二場　主持：郭梨華（東呉大学哲学系副教授）

「顧炎武如何解読性自命出」
〔発表人〕John Delury（イェール大学歴史系博士生）
〔評論人〕郭宝文（台湾大学中国文学碩士）

「《管子・心術上》中之「虚」」
〔発表人〕Wolfgang Schwabe（ベルリン大学漢学博士）
〔評論人〕郭梨華

第三場　主持：林啓屏（政治大学中文系教授）

「上博簡《詩論》中「民性固然」之蠡測」
〔発表人〕上野洋子（日本大阪大学文学院博士生）
〔評論人〕朱湘鈺（龍華科技大学通識中心講師）

「《大戴礼記・曾子天円》篇中的聖人像」
〔発表人〕久保由布子（日本東北大学文学院博士生）
〔評論人〕楊蕙旖（台湾大学哲学研究所博士生）

第四場　主持：曾春海（政治大学哲学系教授）

「李玉孫《尚書隸古定釈文》「杼材」篇初探」
〔発表人〕陳秀玉（中国技術学院通識中心兼任講師）
〔評論人〕朱心怡（実践大学通識中心助理教授）

「従《六徳》看儒家的人倫内涵」
〔発表人〕潘玉愛（元培技術学院通識中心兼任講師）
〔評論人〕久保由布子

三月二十八日（星期一）

第五場　主持：葉海煙（東呉大学哲学系教授）

「《新書》的諫諍研究——従先秦到漢代的諫諍変遷」
〔発表人〕前川正名（日本京都産業大学兼任講師）
〔評論人〕潘玉愛

「論《荘子》的生命本体之楽与道楽」
〔発表人〕林明照（東呉大学哲学系兼任講師）
〔評論人〕福田一也

第六場　主持：佐藤将之

「《古本竹書紀年》中的「春秋之筆法」与《春秋経》」
〔発表人〕井上了（日本京都産業大学文化学系兼任講師）
〔評論人〕蘇建洲（中国技術学院通識中心助理教授）

「東漢三思想家対孝的批判与《荀子》的「孝」観念」
〔発表人〕佐野大介（日本奈良大学兼任講師）
〔評論人〕林明照

第七場　主持：林義正（台湾大学哲学系教授）

「《礼記》論「楽」新探」
〔発表人〕朱湘鈺（龍華科技大学通識中心講師）
〔評論人〕上野洋子

「論《荘子》之自我觀——以「吾喪我」為探討中心」
〔発表人〕洪嘉琳（台湾大学哲学研究所博士生）
〔評論人〕邱彦（耕莘護理専科学校兼任講師）

「《周易・繫辞伝》：「形」之析議
兼論「道—器」、「體—用」問題」
〔発表人〕楊蕙旖
〔評論人〕李国璽（台湾大学哲学研究所博士生）

第八場　主持：陳鼓応（台湾大学哲学系教授）

総合討論（林義正・林素英・郭梨華・林啓屏・佐藤将之・福田一也）

閉幕式　主持：陳鼓応

これらの研討会に参加した日本側院生等の感想などは別に掲載されるはずの「座談会記事」に譲り、筆者が個人的に感じた点として若干を述べることとしたい。

中国語の問題

第一に感じたことは、なんといっても現代中国語の問題で、これについてはほとんど言い尽くせぬが、詳細はやはり「座談会記事」に譲ってごく簡単に述べる。

今回の会議では、その目的から当然であるが、発表を中国語で行うことが求められた。筆者は古典漢語でいったんドラフトを作成した上でこれを現代語に訳し、大阪大学に在籍している留学生の助力などを得て、なんとか発表原稿の形を整えた。その他の日本側発表者はおおむね現代語で作文し、あるいは日本語原稿から自力で中訳した上で台湾側院生のネイティブチェックを受けたようである。発表に際しては、筆者は配布用の予稿とは別に読み上げ用の原稿を用意して切り抜けたのだが、しかし質疑応答については台湾側の通訳を大いに煩わせる結果となってしまった。

そもそも筆者のように古代思想を専門とする日本人は、現代語のヒアリングやスピーキングが不自由であってもそれなりに研究はできてしまう。しかし「中国語の発音を知らないのに中国語（あるいは漢文）を読める」とは海外とくに欧米の研究者にとっては理解しがたい現象であろう。読み書きの問題とは別に、「耳の訓練」の必要性を情けなくも痛感した次第である。

研究目的・志向の相違

第二に感じたことは、古典研究に対する「目的意識そのもののズレ」、およびそれにともなう手法の相違である。

たとえば林明照氏の発表「論《荘子》的生命本体之楽与道楽」について、はじめ筆者は、その古典研究としての意義を理解することができなかった。『荘子』から音楽や踊りなどに関する記述を抽出し、これらを系統的に解釈した堅実な研究なのだが、一方で、研究者があらかじめ抱いている「望ましい音楽思想」に沿って『荘子』の記事を配列したような印象も受けたのである。「では動物が

登場する説話を『荘子』から集めれば〈荘子における動物思想〉を研究できるのか」とは、別の日本人参加者による非公式な発言。

日本における漢学研究はどこまでも「外国の古典思想に対する研究」であるが、彼邦では漢学研究とはすなわち「自国の古典に対する研究」であって、発表後に台湾側の方々にうかがった所によると、まず「現代的な意義」が追求される傾向があるということであった。ならばそのような志向は、日本における「経営者のための韓非子のことば」や「サラリーマンのための老子の知恵」といった研究分野（？）のそれにも近いのであろうか。

以下は筆者の偏見だが、もしもこのような志向を突き詰めていくならば、そもそも古典テキストを必要としない研究に帰着する可能性すらあるのではないか。たとえば筆者は、『老子』の各章をユングで解釈していくという「研究」を聴かされたことが（日本で）あるのだが、もしユングが正しいならばユングだけを研究すればよく、その正しさを傍証するために『老子』を援用する必要はなかろう。「現代的な意義」を持つ思想を求めるならば、そのような思想を現代語で述べれば、あるいはそのような「経典」を新たに作成すればよいのであって、わざわざ古典を研究する必要はない。「古典に現代的な価値や問題意識を求める」とは、「現代的な価値観を前提として古典を曲解する」ということ、具体的には「古典を断章取義し現代的な価値を押しつける」ことと紙一重ではないか。日本の平均的な漢学研究者の目的意識や価値意識は、一般社会の要求や欧米・中国の学者のそれからは、たしかに乖離したものであろう。「古典を古典のまま読解し、その中から価値を見出す」べきだと思い、「現代的な価値に直接つながるとは限らない古典独特の価値」を認めたいと願うのは、「日本の中国学」（佐藤氏のいう「中国思想史」）の方法・目的が筆者の膏肓へ染み込んでいるからか。(注5)

しかし、たとえば Delury 氏の発表「顧炎武如何解読《性自命出》」のごとき哲学的な研究は、日本の思想史研究者の大部分にとって、問題設定の意味すら理解できないものではなかろうか。このような点に、欧米を含めた海外の研究者と日本の研究者との間に存在する大きな壁をかいま見たかのように感じた次第である。

研究方法の相違 ― 版本操作を例として

また「新出土文献与先秦思想重構」国際学術研討会において、ある参加者から『曹沫之陳』中に見える『慎子』類似の文についての報告があり、彼我間の情報速度の差（原文を実見できる時期および研究・発表速度の差）を

痛感したのだが、それよりも大きな衝撃を筆者に与えたのは、当該発表で引用されていた類書や『慎子』原典などにことごとく「（電子版文淵閣《四庫全書》）」と注記されていたことである。研究・引用の際にテキストを慎重に選ぶことは、日本で訓練を受けた者にとっては常識である（あるいは、常識であった）。しかし彼邦においては、佚文の検討という分野においてさえ、版本の相違などは問題とされなくなりつつあるということであろうか。否、これは彼邦のみにおける問題ではない。またも個人的な経験で恐縮だが、ある文献や注釈の使用語彙を統計的に検討するという研究で、底本として堂々と『四庫全書』（電子版）」と掲げた発表を筆者は（やはり日本で）聴かされたことがある。最近は演習などの現場で似たような体験をされた方も多いであろう。このような現状に違和感を感じるのは、筆者がたまたま版本学に泥んでいるという理由からだけではあるまい。

古典を研究する目的が「現代的な意義の追求」あるいは「現代の哲学や心理学などとの整合性の追求」であれば、版本間における隻言半句の異同が重要と見なされぬのは当然であろう。出土資料の読解については一般に、文字の同定や訓詁の作業が精密に行われている。しかし、これと対を成すべき伝世文献の読解については近年、ごく大雑把な操作が彼我を問わずまかり通っているような印象を受けるのである。

電子版『四庫全書』、あるいは「ＣＮＤデータベース」「寒泉」といった大型のコンテンツは、出典の調査などといった作業を「研究を構成する大きな要素」から「わずか数秒で済む単純作業」へと引き下げた。これは単純作業の手間を軽減してくれるありがたい「研究手法の進歩」であるが、その便利さの影で、初歩的な資料批判・資料操作の技術を忘れてしまった（あるいは最初から身につけていない）研究者が日本においても増えつつあるのではないか。このようなことは『逐字索引』の頃から言い古されたことである。が、もしこれが（大陸・台湾における大型の文献電子化事業に牽引された）デジタル時代における「研究手法の進歩」であるならば、むしろ日本の「中国思想史」に伝統的なテキストへの偏執（と、それにともなう操作技術）を、対内的・対外的に発信していくべきだと考える。

日本中国学の「世界からの孤立」

最後に、これも別のところで述べられているはずだが、日本の漢学研究が国際的に「相手にされていない」ことについても改めて驚きを受けた。たとえば今回発表され

た Schwabe 氏は、『管子』研究によってベルリン大学で博士学位を取得し、現在は台大の博士課程へ在籍する、いわば『管子』のエキスパートなのだが、金谷治『管子の研究』を読んだことがないということであった。にもかかわらず博士学位を取得したということは、意地の悪い見方をすれば、ベルリン大の指導教授らも金谷『管子の研究』を必読の文献とは評価していない、ということであろう。誤解のないよう言い添えておくと、筆者は「ドイツの古典中国学のレベルが低い」などというつもりは毛頭ない。ただ、日本では必読とされている古典的研究が世界的には必要とされていないという「現実」にただ驚いたのである。

日本の中国学が世界（中国・台湾のみならず欧米をも含めて）から孤立しつつある現状にもっとも危機感を抱いているのは、今回のシンポジウムのコーディネイターである佐藤氏であろう（冒頭「覚書」）。「赤塚忠より以降の日本の研究は、世界的にはまったく読まれていない。」「古典的になりつつある日本の論文を片っ端から中文訳して、ブルドーザーのようにドカドカ紹介していかないとダメだ。」「いますぐ始めないと手遅れになる。」とは氏の発言だが、最後の一言を日本の研究者たちはどのように受け止めるだろうか。素直に信じ「いますぐ始めねば」と中国語を書き始めるだろうか。それとも「なにを大げさに」と嗤うであろうか。あるいは「世界からなんて相手にされる必要はない」と開き直るであろうか。

中国・台湾・欧米の研究者が密接に関係しつつ研究を推進しているのに対して、日本の中国学研究は「このままでは孤立する」のではなく「すでに孤立している」というのが筆者の印象である。翻言すれば、日本の古典中国学は、世界から相手にされなくとも、国内だけで千数百あるいは二千人程度のポストを（漸減させつつも）抱える閉じた系として、すでに自活しているのである。国際化が「手遅れ」となったことによって日本の中国学が急速に破綻するとは考えられない。むしろ、別の理由によって今後十数年あるいは数十年をかけじわじわと衰亡していくものと筆者は考える。日本の中国学研究が孤立していることを具体的に示された筆者が改めて驚きつつも、このことに佐藤氏ほど切迫した危機感を抱くことができぬのは、筆者の想像力不足もあろうが、日本の中国学が亡びつつあるのは国際化できないことが主要な原因ではない、言い換えれば、たとえ国際化に成功してもそれだけで日本の中国学を救うことはできない、と感じているからでもある。

国際化の遅れは、日本の中国学にとって憂慮すべき問

題の全部ではない。しかし、問題のうち大きな部分ではある。この問題が取り除かれることが、日本の中国学の大きなプラス要因となるのは当然である。しかもこのことは、日本の学界あるいは社会（の学界を見る目）を動かすほどには困難でない。研究者個人あるいは講座・研究室のレベルで実践可能・推進可能な事業なのだ。

日本中国学の国際化

積極的に「世界」に出ていこうとしている日本人研究者は、たとえば今回の「新出土文献与先秦思想重構」国際学術研討会の発表者である池田知久氏や浅野裕一氏など、なお少数にとどまっている。とくに池田氏は、佐藤氏のそれと同様の危機感を早くから抱き、国際化をみずから積極的に実践してきた先覚者でもある。しかしこのような動きは、研究者個人の国際化であっても、学会全体の国際化ではない。海外で池田氏の活動が評価され、あるいは浅野氏の研究が読まれることはもちろん重要だが、それは「特定の中国学者が国際化する」ことであって、「日本の中国学が国際化する」こととは質的に異なろう。

佐藤氏は、「台湾（こっち）の学生が日本に留学して学位を取っても、帰ってくると台湾（こっち）の研究方法に戻ってしまう。」「学位を取りに行くだけで、日本の研究手法や問題意識を学ぶつもりがない。」と嘆く。これは日本から中国や台湾へ留学する院生にも言えることではないか。日本人留学生が彼邦の研究手法や問題意識を身につけて持ち帰り実践すれば、日本の学界全体がそれらを共有（あるいは批判）することもできよう。現在そのような現象が生じていないのは、彼邦に学ぶべき方法・理論が全く存在しないということだろうか？

今回のシンポジウムのテーマである出土資料についていえば、日本における最先端の研究者と目される池田・浅野の両氏は、郭店簡や上博簡の年代について、海外一般の学者らとは異なるそれぞれに独特の見解を展開しつつある。このような問題についてこそ国際的・学際的な研究の交流が必要なのであって、そのためには、彼邦の論理や「言語」、ひいては価値観や問題意識に至るまで、「共有」はしないまでも「理解」することは必要であろう。特に、先方がこちらの研究を必ずしも必要とは感じていない現状下で、こちらの研究を先方での検討という俎の上に「載せていただく」ためには、こちらの論理や問題意識を「理解してもらう」ことは絶対に必要である。たとえば戦国の「中期」か「晩期」かを議論する日本人研究者の論理やその是非よりも以前に、そのような差異に固執する日本人の「問題意識」そのものを、彼邦の研

究者は充分に理解しているだろうか？ もし理解していないとすれば、それは先方の責任だろうか？

先方がこちらの土俵に上がり、胸を貸してくれと求めてくる時代では、今はない。先方の胸を借りるためには、こちらが先方の土俵に上がらねばならぬであろう。

附記

今回のシンポジウムは、前日深夜に中正空港へ到着し、四日間の会議に連続参加し、そのまま五日目の早朝に出国するという強行軍であった。このため参加者の記憶も混乱している虞があることは断っておきたい。

困難のなか会議全体をコーディネイトされた佐藤氏、および、過密なスケジュールに従って車両や宿舎などを手配し、また深夜にもかかわらず空港まで出迎えていただいた林明照氏をはじめとする台湾側スタッフの方々に、あらためて感謝する。

注

(1)『先秦思想暨出土文献国際青年学者学術研討会：会議論文』(二〇〇五年、主弁単位：台湾大学哲学研究所研究生学会・簡帛資料文哲研読会、賛助単位：中国哲学会・行政院教育部・台湾大学文学院・明目書局・山外書局、NACSIS-ID:BA72168493)

(2)『「新出土文献与先秦思想重構」国際学術研討会：会議論文』(二〇〇五年、主弁単位：台湾大学哲学系・中央中央研究院中国文哲研究所・輔仁大学文学院・東呉大学哲学系、賛助単位：行政院国家科学委員会国際合作処、NACSIS-ID:BA72169598)

(3)『国際シンポジウム戦国楚簡と中国思想史研究：会議論文集』(二〇〇四年、簡帛道家資料暨新出土文献研読会・戦国楚簡研究会、NACSIS-ID:BA72479405)

(4)『「日本漢学的中国哲学・思想研究：観点・方法論・以及其意義」国際学術研討会：会議論文』(二〇〇五年、主弁単位：国家科学委員会人文学研究中心)

(5) いわゆる『中国哲学』の『合法性』の問題については、「東亜思想中的伝統与現代」シンポジウム報告（*University of Tokyo Center for Philosophy bulletin*, vol.3）および『中国 社会と文化』一九の特集（ともに二〇〇四年）などを参照。